

八重山歴史研究会 報

八重山諸島の塔式墓について

島袋綾野

一. はじめに

現在、八重山諸島では塔式墓(とうしきぼ・とうしきばか)と呼ばれるタイプの墓が増えてきている。名嘉真宜勝らによれば、塔式墓の始まりは日清・日露戦争による戦没者特別弔葬による勲功碑墓(註1)に由来するという(源・名嘉真一九七二、名嘉真一九八三b)。復帰前後には、沖縄本島および周辺離島でも作られていたというが、それらは写真4に示した石碑墓に似て、八重山諸島で一般的に作られているものよりは小さく、さほど普及を見せなかった。塔式墓のほとんどがコンクリートで作った簡易な「破風墓(写真1)・家形墓タイプ」の上に碑を乗せたもので、石垣島を中心に、波照間を含む八重山諸島全域に広がりを見せる。その由来から考えれば、いわゆる沖縄文化と日本文化の折衷墓であると言え

第 57 号

よう。

本報告は、その塔式墓の八重山諸島での普及時期や要因を探ることを目的としたものであり、その受容過程をめぐると試論である。なお、文中の「塔式墓」という名称は、『沖縄県史 民俗一』(源・名嘉真一九七二)および『沖縄大百科事典』(名嘉真一九八三b)にある記載に従った。

二. 八重山諸島におけるコンクリート墓の普及

現在、コンクリートで作られた墓が増えている。写真1は、昔ながらの破風墓であったものの前面を、作り替えた例である。

破風墓は岩壁を背にして横穴を掘っているのに対し、家形墓は平地に作られ



写真1 破風墓

る家形破風墓を指す（名嘉真一九八三c）。「破風墓・家形墓タイプ」としたのは、本来、破風墓・家形墓は上部を屋根形に傾斜させて作るが、近年は平らにするものが多いためである。しかし、現在では屋根の形や立地条件で名称を分けることはなく、方言名の違いはあるものの一括して破風墓として扱われているようである。ここではその傾向を受け、屋根を平らにするもの、平地に建てるものについても「破風墓」と統一した。

先述のように、現在は八重山諸島全域に見られる塔式墓であるが、その八重山諸島での受容について、明確な資料は残っていない。しかし、聞き取りによって記憶をたどっていくと、四カ村（登野城・新川・石垣・大川）には、昭和初期にすでに数えるくらいはあったという。

太平洋戦争後、コンクリートが入手し易くなり、従来の墓造りよりも安価であるということ、墓の形態そのものがコンクリート製に変わっていった。それは、墓の外観の個性を無くし、小型化する傾向を示す。加えて、こういった墓の普及を加速させたのは、火葬の一般化にあるのではないかという考察もある（牧野一九七五）。つまり、沖縄の墓は洗骨習俗に伴いシルヒラシ所（註2）を設ける必要があったが、火葬するのであればその必要はなくなる。塔式墓には小型のもの

のも多いことから、火葬の普及と墓の小型化という傾向は比例するのである。

八重山における火葬がいつ頃始まったのかについても、明確な資料はない（註3）。人々の記憶に残るのは明治中頃に他府県からの寄留民によって行われてからで、その後、公共火葬場の設置は沖縄本島（現西原町）と同じ一九三九年である。しかし、現在でも八重山諸島の一部地域に洗骨習俗が残っていることからわかるように、すぐに火葬に移行することとはなく、普及し始めるのは先の大戦後のことであるという（宮城一九七二）。これらの事実、塔式墓普及の時期に合致する。しかしながら、コンクリートの普及や火葬といった要因は墓の簡素化・小型化については説明できるが、墓標を墓の上に建てる塔式墓がなぜ普及したのかということの説明にはならない。形態だけならば写真1のような破風墓やその他の様式（写真2〜4）でも良いからである。

三、現況の確認

塔式墓の特徴は墓の中央または横に碑を建て（○○家之墓）と銘書きすることである。そもそも、沖縄の墓には墓標よりも墓誌の方が多く、（○○家之墓）という銘書きの方法も元々の沖縄式ではない（平敷一九八九）。石垣市内において墓



写真2 平地式亀甲墓



写真3 平地式破風墓（家形墓）



写真4 石碑墓

の墓にはなかった。戦時中にも亡くなった日本兵の墓がそのような形（沖縄式の破風墓に碑を乗せたもの）で、手を合わせているのを見たことがある（註4）。

②いつ頃からどのように定着したものはわからないが、戦後とか復帰後とか極端に新しいものではない。しかし、増え始めたのはやはり戦後である。

③昭和の初期からあったと思う

建築を請け負っている業者に聞き取りを行った（二〇〇三年のこと）。石垣市宇石垣にある国吉商会によると、「現在、八重山で作られている墓の主なパターンは三つ、①亀甲墓（写真2）、②破風墓（写真3）、③石碑墓（写真4）である。①と②については、かなり古くからあるが、③石碑墓については戦後、本州から入ってきたデザインだと聞いている。当初、①、②の墓は碑を建てていなかったが、二〇年ほど前から墓碑を希望する人が増えてきた」という。国吉商会は聞き取りをした二〇〇三年当時、創業して約三〇年ということであった。当初、というのはその頃のことと考えられる。

ここで时期的なものを検証してみる。ある一定の年齢の方に、聞き取りを行い、記憶を辿っていただいた。主な質問内容は、①入ってきた経緯について知っているか、②いつ頃から作られるようになったのか、である。聞き取りの対象者は石垣島在住者で、偏りがあることは否めない。

○石垣島四カ字（大川・登野城）の事例（昭和一〇年以前）

①もともとの八重山の墓ではない。コンクリートや石などの材料が手に入らない時には、沖縄式の墓（亀甲墓・破風墓など）の側に角材で碑を作り勲等などを書いて立てていた。その時期には軍人の墓だけに墓碑があり、一般の人

(子どもの頃からあった)。増え始めたのは戦後である。以前の墓は今のように平たい屋根ではなかったので碑をのせる必要がなかったが、物足りないので乗せているのではないか。

○白保の事例（昭和一二年生まれの人の話）

①復帰前からあったが、四カ村から広がって白保の方に増えだしたのは復帰後だと記憶する。

聞き取りによって得られた情報のうち、受容過程のヒントになり得そうなものを紹介した。それぞれの共通点を取り上げれば、初現は昭和の初めから戦後にかけて追うことができそうである。「屋根が平たいと寂しいので碑を建てたのではないか」という意見は数名から得られた。しかし、問題は「碑を建てる」という意識がどこから来たのか、である。現在、沖縄本島から宮古諸島にかけての地域でも、平屋根の破風墓は増加傾向にあるが、屋根に墓碑を建てるという習慣はほとんど見られない。

文字として記録されたものでは、先述の『沖縄県史』の発刊が一九七二年、牧野氏の本が出版された年が一九七五年で、その頃にはすでに作られていることが分かることから、少なくとも三〇年余は経過している。また、喜舎場永珣氏は「昭和期に至って大和系統ともいえるべき日本内地の影響を受けた

墓が各所に作られるようになり、戦後においては大いにその数も増加している」（喜舎場一九七七）とし、やはり先の大戦後に増えてきたことを指摘している。

おそらく、国吉商会から得られた成果は、墓建築の請負が個人から企業になってきた時期であり、八重山諸島において塔式墓が爆発的に増えてくる時期の記憶であろう。

四・八重山諸島における塔式墓受容期の社会的背景

先述のように、塔式墓は沖縄本島および周辺離島ではほとんど普及していない。では、なぜ塔式墓が八重山諸島で定着したのであるうか。その一つの可能性をあげると、八重山と台湾を含む、日本列島の南側に位置する島の歴史が考えられる。

一般的普及時期としての「太平洋戦争後」から、八重山における塔式墓受容の様相を探りたい。

①政治的背景から見た台湾と八重山

塔式墓が八重山諸島で作られ始めたと考えられる昭和初期、石垣島を中心に台湾人の入植が始まる。一九三一（昭和六）年頃からその数は増え始め、稲作の改良や熱帯果樹（パイナップルなど）の育成と普及に大きな影響を及ぼしている。また、逆に一八〇〇年代の終わりから沖縄から台

湾へ移り住んだ人々も多い。沖縄社会をそのまま移植したような集落が、一九三五（昭和一〇）年頃で一三ヶ所確認されている（又吉一九八九、一九九〇）。それらの背景には、「帝国の南門」を沖縄から台湾へ移そうとした政府の動きがあった。

一八七一年の台湾遭害事件をきっかけに明治政府は台湾出兵を行う（一八七四年）。この台湾遭害事件から台湾出兵までの間に琉球には大きな動きがあった。一八七一年の廃藩置県においても琉球国はいわゆる日本国の版図ではなかった。しかし、台湾遭害事件をきっかけに琉球国が「日本」であることを主張する必要性を感じた明治政府は、一八七二年に琉球藩を設置する（一八七九年沖縄県になる）。これにより「国民が殺されたことに対する報復」という台湾出兵への口実が出来たのである。日清講和条約調印の翌年、一八九六年には内台航路を開設し沖縄本島・八重山を経由して台湾へ向かう航路を確立した。政策により沖縄經由航路の減船すると、今度は沖縄県主体の沖台航路開設に至る。一八九九年には八重山高等小学校が台湾への初めての修学旅行に出発し、これまで以上に、沖縄人・八重山人にとって台湾はより身近な場所と認識されるようになる。

加えて、沖縄人教員は明治政府の同化・皇民化教育の経

験者であったことなどから、早くから台湾公学校の教師に任せられ台湾教育の戦力として多く渡台した。しかし、ここでは支配者としての日本人と見られる反面、日本人社会の中では差別と偏見の対象とされるなど、苦労は絶えなかったという。そういった中で改姓を行ったり、これまでの生活習慣を捨て沖縄出身であることを隠す者も多かった。それでも、政府が沖縄振興策を軽視したことによる社会施設・産業基盤の遅れがあり、新天地を求めて多くの沖縄人が自ら希望し渡台したのである。

その後、太平洋戦争を目前に政府は台湾疎開を閣議決定し、一九四四年に沖縄県民の本格的な台湾疎開が始まった。その際の疎開者のほとんどが宮古・八重山の人々である。特に、八重山では石垣町だけが実施され、特に新川・石垣が最も多かったという（牧野一九七二）。敗戦後、戦前・戦中を通して疎開したほとんどの人は引き揚げ、八重山諸島にも多くの人々が戻ってきている。

②八重山諸島における日本文化受容の基盤

琉球処分後、日清・日露戦争時にはすでに沖縄からも出兵しており、中には戦死するものもいた。日露戦争では八重山出身者七名の戦死が確認されている（石垣市一九九六）。現在でも、日露戦争時に戦死者を奉った忠魂碑が



写真5 石垣村忠魂碑



写真6 陸海軍戦没者合葬碑

残っている（写真5）。

また、太平洋戦争以前、戦後、合葬された軍人の墓には墓標が建てられた（写真6）。名嘉真氏のいう勲功碑墓である。これらの勲功碑墓は旅団本部や在郷軍人で作られることもあったが、その他に町や村をあげての町村葬の習慣があった。町や村単位で弔われた墓には、やはり同様な墓標が建てられ、墓標のある墓を拝むという習慣があったことがわかる。なお、現竹富町の島々、与那国島にも同様に町村葬があった。与那国島では浦野墓地群に、現在でも多

くの個人を讃えた勲功碑が移設されたりしながらも残っている（写真7）。そのほとんどが昭和一七年前後で、南洋で戦死したという記録が記されていた。

さらに、墓の問題とともに、精神文化の面で御嶽の鳥居を取り上げると、ここでも折衷様式を見いだすことができる。八重山諸島での最初の鳥居建設は一六一四年権現堂の設立に伴うものであるという。大和在番駐在時代（一六四一年〜一六四九年）には多くの大和文化を導入しているが、この時期に在来の聖地であった御嶽に鳥居を作り始め、明

治時代までに普及するに至ったと想定されている（牧野一九八九）。また、現在のようになら、ほとんどの御嶽で作られるようになったのは、「戦前の同化教育の際に日

本の神社をまねて作った」や「大正以降、神社風にするために作られたもの」という聞き取り例が得られている（註5）。

当時、「風俗改良」という名の規制があった中で、無形の伝統的文化を守りながら、大和文化の有形の要素を取り入れていく様子がうかがえる。

政策的には、宗教改革としての御嶽再

編がある。一九一六年に表面化したと言われるが、沖縄固有の御嶽信仰を国家神道に組み入れる動きのことである。

つまり、御嶽を再編して各村ごとに神社を建立しようというもので、皇民化を促進するための施策であったが、沖縄戦を目前に挫折する。八重山では石垣町大川の石垣御嶽



写真7 与那国島浦野墓地に残る勲功碑

およびその一帯が「八重山神社」の候補地にあがるが、戦中の混乱期に立ち消えになっている。これらの伝統的祭事にまで介入してくるといふ現象は、聞き取りによつて得られている大正以降の鳥居建築の一要因となりうるものである。

聞き取り調査を行った際、数名の方が「戦前・戦中は」大和文化は台湾から習ってきた」と、台湾での思い出を話された（註6）。前述した台湾への修学旅行にも関連し、「台湾植民地支配下における沖縄の位置、特に、隣接する八重山諸島の役割を明らかにし、その自覚を求める狙いが含まれていた」と又吉氏が指摘するように（又吉一九九〇）、同化教育の中でも、沖縄本島および周辺離島と、八重山諸島・台湾とでは若干ニュアンスが違う。さらに、沖縄全域に言えることではあるが、各島で受けた同化教育ではなく、台湾やその他、移民・疎開地の日本人社会で実践していく中で日々の生活から浸透していった「大和文化」があるという事実を踏まえなくてはならない。

八重山諸島にはいわゆる大和人のほか、台湾人が多く出入りし、逆にたくさんの方の八重山人が台湾へ渡り、帰ってきた。沖縄本島や本州と比べると人数的に多いというわけではないが、人口比では高くなる。聞き取り調査や歴史的環境、型式

的な事象からも、塔式墓のデザインは勲功碑墓、石塔墓など八重山諸島で弔われた大和人や軍人の墓から始まり、その「墓碑」というモニュメントを受容し、沖縄独特の墓の形態と折衷するスタイルを作ったと考えられる。

五・塔式墓受容の過程試案

塔式墓の変遷過程を聞き取りの成果や当時の社会的背景から時系列に並べると、第一表のような試案ができる。あくまでも、現状での試案であり、さらに事例が増えれば再検討を余儀なくされる性格のものである。

沖縄では元来、墓標を作ることほとんどない。多くは先述のとおり墓の中に納める墓誌（厨子・誌板・板金・石碑類・瓦位牌・瓦証文）である（平敷一九八九）。塔式墓の最大の特徴である墓碑文化受容の経過としては、外から持ち込まれた「大和文化」が大きく影響している。大和在番、戦前からの炭坑夫をはじめとする多くの大和人が八重山諸島に生活し弔われる中で、次第に村の墓域の中に①大和式の墓標を持つ墓が見られるようになる。特に同化教育の中で精神文化にまで深く大和文化が入り始め、大和式墓の存在や町葬などで讃えられた②勲功碑墓の存在を認識するようになる。さらに、台湾での生活経験を持つ人々は、そこで、八重山諸島で受け

た教育とは別の、日本人社会での精神文化を学び島に戻る。

沖縄戦が始まり日本軍が入ってくると、島内での戦死者も増え始める。戦死した軍人の中でも八重山出身者は家族墓に納骨されたが、その際には③当初、墓標は墓の側に角材などを使って立てていた（註7）。後に石やコンクリートなどの材料が手に入るようになる④勲功碑墓をまねて墓の上に墓標を建てるようになった。聞き取りによって得られた比較的早い時期の塔式墓というのは、おそらくこうい

第1表 受容過程（試案）

<p>①② (軍戦死者のみ) (大和人のみ)</p> <p>①→②→③ (大和人・軍人)</p> <p>④ (軍人)</p> <p>⑤⑥ (八重山人に普及) (八重山人に受容される)</p> <p>⑦ (現在では定型化)</p>	<p>①初期大和式墓（大正期から炭坑等で八重山に多くの大和人来島、墓碑があまりなかった沖縄の墓に墓碑の存在が認識される頃か？）</p> <p>②勲功碑墓（日清・日露戦争中・後～太平洋戦争中）</p> <p>③土葬に墓標を建てるもの、亀甲・破風墓の傍らに墓碑を立てるもの（日清・日露戦争後～太平洋戦争中・後）</p> <p>④簡易な破風墓が増える中で、勲功碑墓を模した墓が作られる（太平洋戦争中・後）</p> <p>⑤簡易な破風・コンクリート墓（破風墓タイプ）の普及（太平洋戦争後）</p> <p>⑥平屋根の上に墓碑を建てるもの（⑤とほぼ同時期か？）</p> <p>⑦亀甲・破風墓の上に墓碑を建てるものや石塔墓（復帰前後を期に量産型のタイプへ）</p>
--	---

った軍人の墓であろう。戦後になって、コンクリートの普及・火葬の増加とともに一般的に⑤簡易にできる小型の破風墓が増え始める。その後、破風墓の中でもブロックやコンクリートを使い屋根を平らに作る、より安価なタイプが一気に広がった。本来、破風墓は屋根に傾斜をつけるべきものであるが、平らということに抵抗を覚える人も少なくなかった。墓の上に墓標を建てるという様式が、沖縄式にない物珍しいもので、さらに戦中までは軍関係者のみが許される「特別なもの」であったこともあり、象徴的に⑥新築された平屋根の沖縄式家族墓に墓標を建て始めたのが、又吉氏のいう勲功碑墓に由来する塔式墓の原型だと考えられる。復帰（一九七二年）前後に振興策によって莫大な公共事業予算が投入されると、土地改良などのため墓域が移動し、墓の建て替えが増えるのと同時に、八重山諸島では⑦定型化する塔式墓が完成したと推測できる。現在ではさらに、雨よけ・日よけとしての庇が庭の部分についている（写真8）。

塔式墓の石垣島における広がりを見ると、移民集落よりは元々の石垣島民が多い四カ村から始まり、石垣島全域へ広がっている。大規模な工事の入らなかつた竹富町の島々は、復帰後も長く古い墓の形態を残していたが、近年は塔式墓に変わりつつある。



写真8 庇のついた新しいタイプの塔式墓

さなシマ社会の単位（ただ単に島というだけでなく、字・行政区・自治会のような単位を含む）での伝達スピードが速く、かつ、八重山行政の中心・流行の発信地としての四カ村からであったことが考えられる。そしてそのスピードをさらに加速させたのは、八重山く台湾という一円の地域において行わ

①～⑥までの過程は沖縄本島から八重山諸島までほぼ同じである。沖縄本島ではあまり作られなかつたのに対し八重山諸島で受容されたのは、異文化にあるシンボリックなものに伝統的なものに取り入れた場合、小

れた集中した「同化教育」であり、そのエリア内での実践を含んだ「大和文化」の受容は八重山人の精神面に大きく影響しているものと思われる。

現在では塔式墓は「定型・商品化」され、さらに古い墓の上もしくは脇に墓標だけを建てるものがあるなど、伝統的な墓の形態に溶け込んでいる。

六．おわりに

塔式墓が普及する中で、古くから続く墓の形態が減少している。特に、戦後の混乱期、そして復帰前後の大規模な土地改良、近年のダム建設によって墓域を移動した際の作り替えが大きい。ところが、比較的新しいと思われる塔式墓でさえ、その経緯や時期については明確な資料を得ることはできなかった。

しかし、聞き取りや僅からながらも記載された事項、歴史的背景から読み取れば、受容の基盤として、同化教育による「日本文化」の影響を見いだすことができるのではないだろうか。それらの定着過程には台湾における日式墓の存在と同様の出発点から、さらにそれらを受容するだけの精神的基盤が八重山人にはあったからだと考える。

現在、石垣島だけでなく波照間島、与那国島まで広く広が

っている塔式墓について、地元の人々のほとんどはその原型を知らない。現在、墓の建築に携わっている業者でさえ、周囲の墓にあわせてひとつのデザインとして扱っており、そのデザインになんの違和感も覚えていない。名蔵には眺明園と呼ばれる台湾系移民の共同墓地があるが、そこでもほとんどの墓が塔式墓になり（小熊一九八九）、宮古島ではほとんど見られないにもかかわらず、石垣市内にある宮古出身者の郷友会墓地にも塔式墓が並ぶ。

この塔式墓が八重山になぜ定着したのか。より深く探ると周辺諸国や沖縄・日本本土から見た八重山諸島のポジションが別の視点から明らかとなるだろう。

なお、聞き取りに際しご協力頂いた皆さまには、記して感謝申し上げます。

※本稿は墓標研究会発表要旨（二〇〇三年九月一五日）に加筆・修正したものである。

追記・西表島での墓の変化について、石垣金星氏より以下の情報を受けた。以下、メモを掲載する。

一、祖納にある初代慶来慶田城用緒の墓がさましくそうです。大正七年改築時に現在の形にしたものです。墓碑名は「慶来慶田城翁の墓」と書かれています。それ以前は石垣を円形に積み上げた「ちんまさ」式の墓であったそうです。

二、新しいものでは去った戦争で戦没した人は「袖墓／そでばか」と称して、本家の墓の側に塔を立てて葬っています。これは当たり前の死に方をしない人は墓に入らず「袖墓」に葬ることになっている事からです。墓碑には軍の階級名が書かれています。

三、西表における昭和初め炭坑が造ったの墓は「塔式墓」（註筆者・改めて確認したところ、ここで言う塔式墓ではなく大和式の墓碑のある墓の意）です。

〈註一覽〉

(註1) 名嘉真氏の言う「日清・日露・太平洋戦争時期の戦没者を葬った墓」という定義に従った(名嘉真一九八三a)。

(註2) 洗骨する前に、遺体を白骨化させる場所のことである。

(註3) 石垣市の石垣貝塚において、火葬されたと考えら

れる骨の出土がある。石で囲われた大きな墓に埋葬されたその骨は、混在する遺物から一五世紀前後のものと考えられているが、火葬された骨はもちろん、墓のタイプそのものも同時期に類例がなく、時期を断定するのは困難である。また、層序も安定していない。

(註4) 名嘉真氏が指摘した勲功碑墓に当たるものである。

(註5) 同様な報告は、牧野氏の「八重山の寺院(お嶽)・鳥居・民族性(一九八九年)」にも書かれている。

(註6) 「概史四 日本の台湾統治と八重山」『八重山写真帖』(石垣市二〇〇一)においては、「八重山の近代化は、本土よりもむしろ台湾からの影響を強く受けているからだ」と述べている。

(註7) 大田静男著『八重山の戦争』にも、木製の墓標を作ったという例がある(大田一九九六)。

〈引用および参考文献一覽〉

石垣市総務部市史編集室編『平和祈念ガイドブック ひびけ平和の鐘』一九九六年

石垣市総務部市史編集室編「概史四 日本の台湾統治と八重山」『八重山写真帖—二〇世紀のわたち—』上巻 一

七八頁 石垣市 二〇〇一年

大田静男「陸海軍戦没者合葬碑」『八重山の戦争』シリ―ズ八重山に立つNo.1 三二頁 南山舎 一九九六年

小熊英二『日本人の境界』 新曜社 一九九八年

小熊誠「石垣島における台湾系移民の定着過程と民族的帰属意識の変化」『琉中歴史関係論文集』第二回琉中歴史関係国際学術会議 五六九―六〇二頁 同実行委員会一九八九年

喜舎場永珣「八重山列島の葬礼習俗」『八重山民俗誌』上巻 六一―六三六頁 沖縄タイムス社 一九七七年

名嘉真宜勝 a 「個人墓」『沖縄大百科事典』中巻 一二六頁 沖縄タイムス社 一九八三年

名嘉真宜勝 b 「塔式墓」『沖縄大百科事典』中巻 八九二頁 沖縄タイムス社 一九八三年

名嘉真宜勝 c 「家形墓」『沖縄大百科事典』下巻 七一四頁 沖縄タイムス社 一九八三年

平敷令治「台湾漢人社会の墓制」『文学部紀要（社会学科篇）』第一四巻第一号 一―三二頁 沖縄 国際大学文学部 一九八六年

平敷令治「沖縄の墓誌」『シンポジウム南島の墓』 沖縄出版 一九八九年

平敷令治「第三節 台湾漢人社会の墓制」渡邊欣雄編『祖先祭祀』環中国海の民俗と文化―三 二五三―二八〇頁 凱風社 一九八九年

牧野清『新八重山歴史』 私家版 一九七二年、牧野清「五、葬制の推移と龕の終末」『登野城村の歴史と民俗』

二五四―二五七頁 私家版 一九七五年

牧野清「八重山の寺院（お嶽）・鳥居・民族性（一九八九年）」『八重山のお嶽』 あゝまん企画 一九九〇年に掲載

又吉盛清「台湾領有と沖縄」『琉中歴史関係論文集』第二回琉中歴史関係国際学術会議 四八一―四九三頁 同実行委員会 一九八九年

又吉盛清『日本植民地下の台湾と沖縄』 沖縄 あき書房 一九九〇年

又吉盛清「解説」『沖縄と台湾』沖縄県史ビジュアル版6 近代① 沖縄県教育委員会 二〇〇〇年

源武雄・名嘉真宜勝「第四節 葬制 箱式・塔式墓」『沖縄県史』第二二巻各論編一〇民俗一 六七二―六七三頁 琉球政府 一九七二年

宮城文「第四編 人の一生 第三節 墓造り」『八重山生活誌』 四四六―四五二頁 沖縄タイムス社 一九七二年